

⑫ 実用新案公報 (Y 2) 昭57-58332

⑪ Int.Cl.³

識別記号

庁内整理番号

⑬ 公告

昭和 57 年 (1982) 12 月 14 日

F 01 P 1/06

6477-3G

（Vベルト冷却）

外気等へ

（全 3 頁）

BEST AVAILABLE COPY

⑮ 動力農機における冷却装置

審 判 昭54-6378

⑯ 実 願 昭49-20846

⑰ 出 願 昭49 (1974) 2月22日

⑱ 公 開 昭50-111535

⑲ 昭50 (1975) 9月11日

⑳ 考 案 者 首藤矩矢

松山市土居田町13区 588

㉑ 考 案 者 五十嵐高

松山市土居田町13区 588

㉒ 考 案 者 今西克己

松山市土居田町13区 588

㉓ 考 案 者 山本武憲

松山市土居田町13区 588

㉔ 考 案 者 岡崎俊彦

松山市土居田町13区 588

㉕ 出 願 人 井関農機株式会社

松山市馬木町 700 番地

㉖ 引用文献

実 公 昭44-13057 (JP, Y1)

㉗ 実用新案登録請求の範囲

強制空冷用冷却風吸入口 12 a を備えたエンジンカバー 12 で羽根 14 付のフライホイール 13 が
 抜け、安全カバー 11 で原動ブリー 6・主軸ブ
 ーリー 8 およびこれらに掛け渡された伝動ベルト
 9 の全周が被われ、この安全カバー 11 は、原動
 ブーリー 6 側と主軸ブリー 18 側とに前開口部
 11 a と空気導入口 15 とを備えていて、羽根
 14 の回転で空気導入口 15 から吸い込まれた空
 気が伝動ベルト 9 および原動ブリー 6 のそばを
 通つて前開口部 11 a からエンジンカバー 12 内
 に吸い込まれるように、強制空冷用冷却風吸入口
 12 a に前開口部 11 a を合せて設けられている
 ことを特徴とする動力農機における冷却装置。

考案の詳細な説明

この考案は、耕耘機等の動力農機における伝動
 ベルトの冷却装置に関する。

従来の動力農機では、エンジンとギヤケース間
 5 を V ベルト等の伝動ベルトを使用して動力伝達を
 行う場合、該伝動ベルトの外周及び外側面は通常
 カバー体で被覆していたが、内側面を開放してい
 た為、作業者がこの開放部から手指を挿入した場
 合回転している伝動ベルトと伝動ブリー等により
 10 手指を切損する事故を引起していた。この為安全
 面から伝動ブリー・伝動ベルト等の回転体は、
 全面をカバー体で覆うようにして手指が挿入でき
 ないような構成となつてきた。

しかし、このように全面をカバー体で覆よう
 15 になると、エンジンからの伝導熱により温度上昇
 する原動ブリーが駆動抵抗の増減により、伝動
 ベルトとの間で滑り摩擦を生じると、カバー体内
 の空気の流通がないため途端に伝動ベルトの温度
 が上昇したまま下がつてなくなる。

20 この温度上昇に伴ない伝動ベルトが延び、これ
 によりさらに伝動ベルトのスリップが増大して過
 熱の恐れを有していた。

このような不具合を解消するため、本願考案は
 次のような技術的手段を講じた。即ち、強制空冷
 25 のエンジン 4 において、エンジン 4 から機体 2 の
 主軸 7 へ動力の伝達をする原動ブリー 6・伝動
 ベルト 9・主軸ブリー 8 からなる伝動装置の前
 後側面・上下側面および左右両側面を被覆する安
 全カバー 11 における前開口部 11 a を、エンジ
 ンカバー 12 の冷却風吸入口 12 a に連通したこ
 とを特徴とする動力農機における冷却装置の構成
 とした。

次に、図面に示す実施例に基づいて、この考案
 を説明すると、1 は動力農機で、この動力農機 1
 35 の機体 2 には、前方に突出するように搭載枠 3 を
 取付け、この搭載枠 3 にエンジン 4 を搭載し、エ
 ンジン 4 の原動軸 5 には原動ブリー 6 を取付け

ている。また、機体2の上部には主軸7を軸架して、この主軸7には主軸プーリー8を取付け、原動プーリー6と主軸プーリー8とに伝動ベルト9を緩く巻き掛け、テンションアーム10に取付けられているテンションプーリー11を伝動ベルト9に圧接したり離間したりすることにより、伝動ベルト9を緊張弛緩して、動力の断続をするように構成している。

11は、安全カバーで、この安全カバー11は、原動プーリー6、主軸プーリー8、伝動ベルト9の上下側面、左右両側面、前後側面を被覆するように構成されていて、この安全カバー11の前開口部11aをエンジンカバー12の冷却風吸入口12aに連接するように機体2に取付けている。

なお13はフライホイール、14は羽根、11bは安全カバー11の内側に開口していてテンションプーリー11が上下動する長孔、11cは安全カバー11の内側面に構成されていて主軸7が侵入する開口部、15は空気導入の為の手指の入らない小さな導入孔である。

上述のように構成されているので、エンジン4を回転すると、フライホイール13と共に羽根14が回転して、安全カバー11内の空気を吸入して、冷却風をエンジン4のシリンダーヘッドその他に送り冷却する。

従つて、長時間作業しても、長孔11b・開口部11cまたは導入孔15等の間隙部から安全カバー11の内壁面を案内風路として冷却風吸入口12aへ流れる冷却風を利用して、内壁面近傍に

位置する伝動ベルト9に沿つてこの冷却風を流すので常に新鮮な冷却風が長い時間に亘つて伝動ベルト9を冷やす事となり、伝動ベルト9の高温延びを押さえ耐久力を大幅に向上すると共に、エンジン4から一体的に突出しているためエンジン4の伝導熱により除々に温度上昇する原動プーリー6を、冷却風吸入口12aの近傍に位置させたので、冷却風を吸入している限り該原動プーリー6の温度上昇が押さえられることになり、伝動ベルト9への伝導熱を非常に少なくできるので伝動ベルト9の発熱を防止して長時間の連続運転をすることができるようになつた。

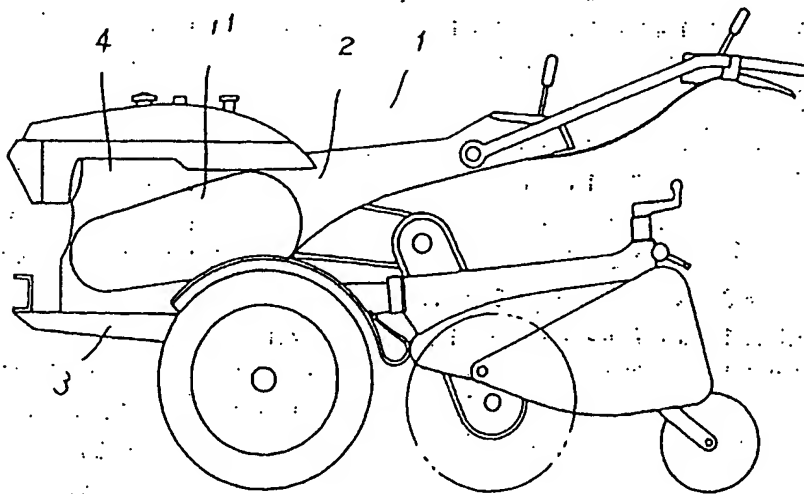
このように、この考案では、従来エンジンに保有している強制空冷用冷却風吸入口12aに全面を覆つた安全カバー11の一端開口部11aを臨ませ、他端側に設けた空気導入孔15から安全カバー11の内部を通過させて冷却空気を取入れたので、特殊なベルト冷却装置を必要とせず、そのうえ伝動装置の安全カバーとしても高性能で構造簡単なカバーを提供でき得る。

図面の簡単な説明

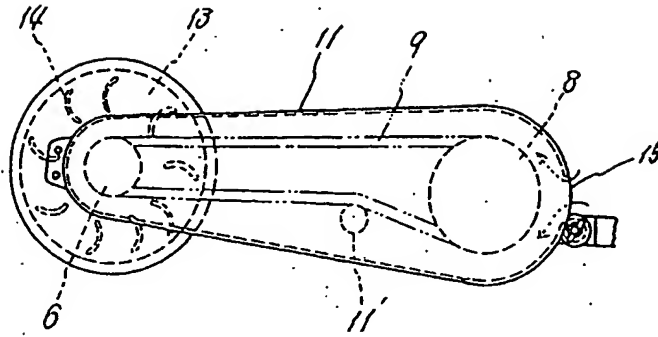
図は、この考案を施した動力農機を示すもので、第1図は全体側面図、第2図はその要部の側面図、第3図は要部の断面平面図である。

図中、記号2は機体、4はエンジン、6は原動プーリー、7は主軸、8は主軸プーリー、9は伝動ベルト、11は安全カバー、11aは前開口部、12はエンジンカバー、12aは冷却風吸入口を示す。

第1図



第2図



第3図

